特集に寄せて

熊本和正

平成20年（西暦2008年）の8月と9月に、中華人民共和国（以下、中国）の首都北京を主な会場として、第29回夏季オリンピック大会および第13回夏季パラリンピック大会（以下、北京オリンピック・パラリンピックあるいは北京五輪大会）が開催された。そこで、今回の特集テーマを標記の通りに設定し、本センター教員各自の最も興味ある題材を選んで自由な視点から分析することにした。また、本学非常勤講師の難波真理先生（天理大学）が現地にてパラリンピックを観戦されたので寄稿をお願いした。私は特集の一番目として、この北京五輪大会に関わる豊富な話題の中から、心に残る出来事をいくつか選んで振り返っておくことにする。私は現地観戦していない。日本国内の新聞とテレビから得られる情報を基にしている。また、これらの特集記事が執筆されたのは平成21年1月末であることをお断りしておきたい。

聖火リレー

この北京五輪大会は、開催決定後から開催を反対し参加ボイコットを主張する動きが国際世論の一部にみられた。中国のチベット民族弾圧や人権問題などに抗議するため、聖火の点火セレモニーや聖火リレーを妨害する行為が世界各地でおこなわれた。各国における聖火リレーは、中国の警察官と見られる「青い服の集団」によって厳重に護衛された。日本においては、聖火リレーのスタート地点とされていた善光寺の本堂への落書きなどがあり、混乱防止とチベットに対する配慮を理由に、善光寺がスタート地点を辞退した。

食の安全性

平成20年1月には、中国製冷凍餃子や食材による日本国内の食中毒が報道され、農産物や加工食品などを中国に大きく依存する日本の食生活の不安定さを改めて実感した。また、選手や観戦ツアー客の現地における食事の安全性が心配された。後日、選手村の食事はとてもおいしかったという日本代表選手の声をテレビ等で聞くことが出来た。しかし、9月には中国の乳および乳製品を使用した加工食品にメラミンが混入していることがわかり、メラミン混入の粉ミルクを飲んだ乳児らが重い腎臓障害等の被害を被っていることが報道された。

四川大地震

開催準備を急ぐ中国は未曾有の天災に見舞われた。5月12日に中国中西部の四川省にて発生したマグニチュード8.0の大地震（四川大地震）により、大勢の人々が亡くなられた。日本からも緊急救援隊が派遣された。震災前より競技施設建設の遅れが心配されていたが、中国は大会開催に間に合わせた。

大気汚染

北京の大気汚染についてはしばしば報道され、選手と観客の健康への悪影響が懸念されていた。男子マラソンの金メダル最有力候補が、持病の喘息が悪化する危険性を理由にマラソンへの不参加を表明した。直前まで日本で調整するなどの対策をとる国々もあった。実際には大会期間中の北京の空は澄んでいたと報道され、中国政府が何らか

近畿大学健康スポーツ教育センター
〒577-8502　大阪府東大阪市小若江3-4-1

の対策を施したことが推察された。

中東の笛

「中東の笛」とは、莫大な資産を持つアラブ諸国の王族などが、多額の活動資金をスポーツの国際競技団体等に提供する見返りに、それら団体の役職に就任し、地位や権力を利用して、大会運営から審判の判定にまで影響を及ぼすことを言う。ハンドボールの北京オリンピック・アジア予選における、審判のあまりにも不公平な（不可解とさえ言える）判定が問題となった。国際ハンドボール連盟（IHF）の裁定により、このアジア予選が無効とされ、同予選のやり直しが行われることになり、この事例を通して「中東の笛」が日本で広く知られることになった。「中東の笛」はハンドボールだけでなく、他の競技種目においても指摘されている。

競泳の代表決定戦

前回アテネ大会の男子200mバタフライ銀メダリスト山本貴司が、代表決定戦において派遣標準記録を突破したが、着順で惜しくも日本代表を逃した。代表となった松田丈志は、競泳男子200mバタフライ決勝においてマイケル・フェルプス（米国）に迫る快心の泳ぎで自己記録を大幅に更新し（日本新記録）、銅メダルを獲得した。山本は四度目のオリンピック出場はならなかったが、若手選手を牽引し成長させる重要な役目を果たしたと言えるだろう。

スピード社製競泳水着

英国スピード社の水着を着た選手が、各国の選考会などで次々と世界記録を更新した。この水着は着ると体が浮くとか、からだを強く締め付けることで水の抵抗が軽減されるとか等の様々な情報があったが、日本代表チームには国内メーカー三社の水着が与えられており、またそれらのメーカーに所属している選手もあり、選手達はスピード社製水着を着るか着ないかで、ずいぶん悩まされることになった。

薬物ドーピング

陸上男子ハンマー投げの室伏広治は、アテネ大会に続いて今回も上位入賞選手のドーピング違反による失格に伴う順位繰り上げになり、前回アテネ大会では金メダル、今回は銅メダルに輝いた。薬物など使わずに頑張るクリーンな室伏に、メインスタジアムの表彰台でメダルを掛けてあげたいと思ったのは私だけではないだろう。

感謝と自覚

陸上男子400mリレー決勝で日本チーム（塚原直貴、末續慎吾、高平慎士、朝原宣治）は三位に入賞し、銅メダルを獲得した。陸上トラック種目でのメダル獲得は、人見絹枝以来80年ぶりのことだった。この種目の予選で前回アテネ大会金、銀、銅メダルの英国、米国、ナイジェリアがバトンパスを失敗し決勝進出を逃すという波乱があり、日本に初のメダル獲得へのチャンスが訪れた。歓喜に満ちた長いウィニングランを終えてマイクを向けられた末續が、この結果は大勢の選手と陸上関係者がこの日を夢見て長年にわたり努力を継続してきたことによるものである、という意味の言葉を述べた。それは日本陸上短距離の歴史における、表舞台から裏方までを含むすべての人々への感謝の気持ちであるとともに、過去から現在まで引き継がれてきたバトンを未来に手渡す者としての自覚の表現として、私には理解された。80年ぶりの偉業を成し遂げた選手に相応しい言葉が、走り終えた後の第一声として発せられたことに私はとても感心した。

悲願の金メダル

女子ソフトボールのオリンピック金メダルは、悲願達成という言葉が相応しいものだった。上野由岐子投手は、準決勝のアメリカ戦、同じ日にお

こなわれた決勝進出をかけたオーストラリア戦、そして翌日の決勝で再びアメリカを相手に、2日間3試合で413球を投げ抜いた。表彰式のあと、ボールをグラウンドに並べて2016の数字を形作り、アメリカとオーストラリアと共に写真に収まる彼女らがいた。女子ソフトボールは次回2012年ロンドン五輪大会では野球と同じく正式種目から外れるので、その次の2016年五輪大会では何としても正式競技種目に復活したいとの願いを込めての記念写真であった。

今までの五輪大会も同様であったが、北京五輪大会のテレビ放送と新聞報道などを通して、実にたくさんのメッセージがたくさんのエネルギーを伴って、私たちの心に届けられた。オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であるが、ただのスポーツの祭典ではない。五輪大会の開催国はどのようにあるべきか、何が求められるのか。同様に、世界の大国には何が求められるのか。表面を取り繕ったり、強弁でごまかそうとしたり、力でねじ伏せようとしても駄目なのである。世界中の人達が見ている。そして、それは開催国と大国だけでなく、すべての参加国にも求められることなのである。

夢をみる。憧れる。高い志を持つ。それを実現しようと努力する。仲間と力を合わせ、協力する。挫折する。悲しみを乗り越える。立ち直る。夢をあきらめない。五輪大会は、人が生きていく上で欠かすことのできない心のエネルギーを満たしてくれる。スポーツは生きる力を与えてくれる。私にはそのように思えてならない。